煌く世界～雪降る夜に～

トキメキファンタジー
ラ☆ファル☆

煌く世界～雪降る夜に～

I

この時期になると朝から肌寒く、肌が乾燥する。
イリスはおきると顔を洗いに洗面所えと足を急がせた。寝ぼけていたのか水をありえない勢いで出しはじめるとそのまま顔をつっこんでしまった。
「つめたっ！？」寝ぼけていた頭がだんだん今の状況を飲み込んで行く。
まだ、朝の７時外に出かけるのは気が引けた。
「お腹へっちゃったな・・・」と、イリスが自分の部屋えと歩きながらつぶやく
実は昨日シャオと一緒に狩りを遅くまでしていて何も食べずに寝入ってしまったのである。
食べる物がなくうーんうーんと嘆いていると、家のドアから人の超えが聞こえた。
「イリスー！イリスー！なんであの子出てこないのかしら・・・」
聞いた事のある声、ドアに隠れて見える体のシルエット。
「やばい・・何かすごい嫌な予感がする・・・・」と、合いたくないけれど、無視するわけにはいかずドアの方へ向かうとまたさっきの聞き覚えのある声が大声で私の名前を呼んだ
「イ！リ！スーーーー！！！」
「なにですかっ！」ドアをいきなり開けるとそこにいた女性はびっくりしてお尻からこけていってしまった。
「やっぱあんたか・・・シャオ何のよう？」見事に予想はあたってしまったのである・・・。
「え？昨日約束したじゃん？覚えてない？？」
「　　」無言ですごそうとしたがシャオがあまりにも真剣な目で私をみてきたので、何か約束したかなあ・・っと考え込んでしまう。
「イリスってほんとっ頭悪いよね」と、シャオが言う
さすがにイリスも今の発言に頭にきたのだろうか、大声で叫んでしまう。
「覚えてないのと頭悪いは無関係だよっ！」
「違わない」シャオがすっぱりといいはる
「もういい帰って！私まだご飯とか食べてないんだから！」
「じゃあ、昨日の約束はもういいよぅ」ほんとっ私は何約束したんだろ・・・
「じゃあさじゃあさ今から狩りにいかない！？」シャオが私の手を掴んで叫んだ。私は心の底からため息をつき
「＾＾」
ｶﾞﾗｶﾞﾗｶﾞﾗ・・・・「まったーー！ちょ、あんた何ドア閉めようとしてんの！？何そのやる気のない目は！」
家からひっぱりだされ、ＰＴに無理やり入らされ、な！ぜ！か！シャオと一緒に街に出かけるはめになってしまった。
「たまには２人で出かけるのも悪くないわねー」昨日も一緒でしたけど！っていうか毎日一緒じ

ゃんか！
「まーまーそんな不機嫌そうな顔しないでってば」シャオは笑いながら私の手をとり走り始める。もうどうにでもなれ・・・
「あ、そういえばもうすぐクリスマスだよねー」私は１２月１１９日の肌寒い朝にそんなことを思い出した。
「そうだねー。ってか気づくの遅―――」ある男がドーンっといって飛び込んできたせいでそこで言葉はとぎれてしまった。
もぅ誰！？２人そろえて超えを張り上げるとそこには私達の狩友達のバン・ギウがいた。
「バン・・・・あんたねぇ・・・！」シャオがバン・ギウの首を持ち上げて「削除」と言いながら刀をとりだすからイリスもびっくりして止めにはいった。
「シャオやめなって！たしかにバンが悪いけど、馬鹿でアホで頭の神経いくつかふっとんじゃってるんだし仕方ないよ！」
「イリス悪気はないんだよな・・・？」シャオを吊り上げられたままバン・ギウはおそるおそる言った。
ﾁｪｯ・・・「ﾁｪｯってなんだよ・・・・」
そういやさ、とバン・ギウは呼吸を整えてしゃべり始める「あと５日でクリスマスじゃん！みんなで遊びいこーよ！」
「私はあんたとだけはいきたくないっ」と、シャオは言う
「なんで！」とバン・ギウは泣き出しそうな目でうったえてきた、なんでそんなに真剣なんだろう・・
あ、っとイリスは思いついた
「カティアさん目的でしょ～？」イリスが冗談半分でいいだすと、バン・ギウは「うっ・・」といってそのままうろたえてしまう。
「好きなら好きっていえばいいじゃん！」
「いゃいゃ無理だし！」
「え！何々バンってカティアさんのこと好きだったの！？」もうなんかみんなおもしろ半分で質問攻めしていく
カティアさんというのはアトランティスの末裔で海竜王の巫女だという実際話した事は少なくどこか不思議な空気をもつ人だった。
でもさーっとイリスが言う「どうせならみんな呼ばない？カズノとか姫とか！」
シャオは乗り気だった。「そうだねー。どうせならみんな呼んじゃおっか」
「その必要は・・・ないみたいだよ・・」バン・ギウはこのエリアスの街にあるレストランの店主ピートさんの方を指さす
そこにいるのは・・・姫とカズノだった。
「うわぁ・・またやってるし・・」
「まぁまぁあたりゃでかいんだし博打みたいなもんだろ？」
「私は・・・勇気ないし無理かな・・」
さっきから話している通称博打（カズノ専用）はエンチャントだ。武器や防具あらゆる物に能力

をとりつけるものだ
エンチャントに必要な物は「パズル」だパズルのＬＶは１から１２まであり貼り付けるほど耐久がへっていき成功確立が減っていく。
とりあえず近くによってみると、カズノはこんなことを叫んでいた。
「へいへーい！今回は赤血球キューブ盾＝通称血盾（耐久200↑）を３個もＧＥＴしちまったぜ！これ1つでも幸運を１２貼り付けれれば血盾の３個分につかってお金なんてお釣り付きでもどってくるぜ！」
「いけいけいけー！どんやっちゃえー（ノ｀∀´）ノ！」と、黒月は押しはじめる
なんかめっちゃ盛り上がってるし！
（（（うわぁ・・・馬鹿だぁ・・・ていうか考え方が最低だ・・・）））３人は心の中で思ってしまった
そこでカズノ、カズノ・ナスと黒月は私達の存在に気づいた。
「おーぅ！イリスじゃねえか、どうしたんだ？まさか俺の人生の煌く瞬間を見に来たわけ？」
「「うっさぃ！黙れ！」」私とシャオは超えをそろえて大声をだした。
「まーいいから見てきなよ！」黒月姫は言う
「黒月姫」通称「姫」は、カズノと意外と仲がいい、ていうか博打（エンチャント）が好きなだけだ。
まぁ、たしかにこの博打で成功すればかなり儲かるし自分の装備としてもすごくいいのができるわけだ、たしかにそこだけはいいと思う・・・が、私はこんなことしないぞ・・・絶対・・・
こんなことを考えている内にカズノが持っていた血盾３個にはすでに幸運ＬＶ１０がすべて張られていた。
「え？ええええええ！！！！」イリスは思わず叫んでしまった。
「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡどうだみたかこの俺の博打運を！！！」
なぜ10までかというと、ＬＶ１０までは耐久があれば９５％の確立で成功するのだが、ＬＶ１１と１２になると耐久が残っていても成功確立が７０％と６０％になってしまう、中々高い％だとは思うがこれが中々うまくいかない・・・。
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！全部に１１を貼れた！これやべくねぇ！？」
なんだとっ！とバン・ギウはＯＰ（エンチャントのＬＶオプション）を確認する。
「いくぜ・・・！」
カーンカーンカーン
「ドーン＼(^o^)／」ぶっ壊れた
「よし！ざまぁｗｗｗｗ」シャオはめちゃくちゃ笑いながら言う
「はっはっはっ！まだあと２個あるしな！」ちょっと不機嫌そうに答えるカズノ・ナス
「あぁゆぅれでぃいごぉお！」ｶｰﾝｶｰﾝｶｰﾝ・・・
「ドドーン＼(^o^)／」
「くそざまぁｗｗｗｗｗｗｗｗｗ」またもシャオはゲラゲラ笑いながら言うここまで来るともう

何いってんのかわかんねえ・・
「でも、大丈夫？あと１個じゃない？」と、イリスは言う
「大丈夫・・・大丈夫・・・ﾀﾞｲｼﾞｮｳﾌﾞﾀﾞｲｼﾞｮｳﾌﾞﾀﾞｲｼﾞｮｳﾌﾞ・・・」
「あはははは！壊れちゃうかもよ！？てっか壊れてくださいっ☆」もうシャオ黙ってくれ・・
「い・・・いくぞおお！」ｶｰｰｰﾝ・・・ｶｰｰﾝ・・ｶｰﾝ・・・・
壊れた・・・もう見事に潰れたその場にいる人すべてが固まった・・１人を除いて
「くそわろぉたぁわあｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ楽しい時間をありがとうｗｗｗｗｗｗｗｗｗ」
「シャオキミは少し女の子らしい言葉をつかえないのかっ！」黒月姫は怒りだす。
「ドドドーン＼(^o^)／」もういいから・・・・
「調子のんなバカ！」黒月姫がとうとう切れた。
ｼｭｯっという何かを抜く音・・いや射る音、その瞬間音速のスピードを超えて雷の矢はシャオめがけて飛んで言った。
地面が焼け焦がれていたレストランの中のみんなを巻き込むくらいの威力だった。
「なにすんだバカ姫！あたったら死んでたぞ！」
「しるかっ！」黒月姫は第２撃に備えて弓を構えだす。するとシャオは自身の腰にしていた刀をとりだしはじめる。
こうみえてシャオは剣の使い手でかなりの腕があるのだ。
２撃目の雷の矢が飛んでいくとそれ見切りスッと刀を振り下ろす、すると雷の矢の勢いは殺されて矢は真っ二つに折れていた。弓を下ろし盾とダガーをとりだす。
「弓と刀では相性がわるいのでな」黒月姫はゆっくりと話す、その瞬間２人が同時に飛び出す。
剣と剣が交じり合う１瞬前「何か」に弾き飛ばされた
「「！？」」２人がこちらを見る。そこには弓を持つイリスの姿があった。
「やめな、迷惑だよ」声を出したのはイリスだった。だがイリスの声はそのものではなく別人の用な凛とした声だったしかもイリスはこんな中でも落ち着いているその姿はまるで光が降り注いでいるかのようだった。
シャオと黒月姫は武器をしまう。「ま、イリスが出てきちゃったら仕方ないね」と、シャオが言う
黒月姫は納得がいかないような顔をしているが、とりあえず言うことを聞いてくれた。
イリス、イリス・イヴィエールはこの旅の仲間のリーダーそして最強の武術と弓術を覚えている。イリスはデル族の生き残り英雄としてたたえられていたがそんな事は昔の話で「デル族」を覚えている物も今やこの仲間達以外にはもういない。そうしてカズノのバカ騒ぎから始まった事件？は終了した。ちなみにカズノは破産して食べ物が買えないと嘆いているようだ。

「はあ・・・」とため息をこぼしているのはイリスだった。
「あんな「声」また出しちゃうなんて・・・」イリスは人格がたまに変わる、それはデル族の生き残りエイユウとしてたたわれていたころの自分の「声」それは自分であって自分ではない。
「ごめんごめんついつい本気になっちゃって・・・」シャオはしょんぼりしながら誤る。
もとわといえばシャオが言いすぎたってのもあるけど、イリスはそんなことどうでもいいようだ

った。
「だーいじょーぶ、私は全然気にしてないんだから」シャオの頭をポンポンと叩きながらそんな事をいって夕方の薄暗い町中を歩いていた。
「で、これからなんだけど狩りいっちゃわない！？」
「調子のるなバカ！」
それから少し歩き自分の家で立ち止まり「バイバイ」といい分かれた。
クリスマスまであと４日

II

次の日私が目覚めたのは１１時で起きた瞬間から大騒ぎだった。
昨日シャオと別れ際に「じゃあ、明日はみんなで洋服でも見に行こうね。９時に決闘場に集合ね！」
「あーやばいやばい！！どうしよう！なんで目覚まし壊れてるの！？」慌てながら出かける支度をしているとインターホンが響いた。
「イーリスー？起きてるー？」シャオだシャオだけじゃなく黒月姫もバンもみんないる。
「ごごごごめーーん！寝坊した！すぐ支度するから中でまってて！」
「うっわぁ・・・予想通り・・・。」ﾄﾞﾀﾄﾞﾀと荒れる足音が近づいてくる。
「ふー、おまたせ！」笑いながら言うイリスに誰も何もいわなかった。その日のイリスは桜着物をきている髪の毛の色と、とても似合う。
「まぶい・・・（かわいいという意味　注死語）」カズノが言うとイリスは顔を赤くして下をむいてしまった。
「さ、イリス買い物よ買い物！」シャオがいうと続いて黒月も「私も赤の服はアキタ(・_・)」
「う・・うん、いこっか！」靴を履き外に出るとこんなことを思う、（今日くらい狩りのことなんて考えなく楽しめそうだ・・）
洋服買いは５時間もの間続いていた。主に黒月姫が「赤以外の服があるよ（｀∀´最狂）」
（あぁ・・・うん、よかったね・・・）バン・ギウとカズノ・ナスは疲れきっていた。なにせ女物の服がある店しかいかないものだから約５時間の間ずっと走りっぱなしたちっぱなしでもうヘトヘトだ。
「なーイリスーもう帰ろうぜー・・」バン・ギウがいうと
「・・・・あんた達いたんだ」と、言うのだ。思っている事をなんでもいってしまう故にそれはわざとではない。だからイリスはさほど気にせず洋服の方を向いてまた３人でキャーキャー騒ぎ出す。そしてカズノ・ナスとバン・ギウはショックのあまりソファーに倒れたまま動かなくなってしまった。
楽しかったねー。またいこうねー。いついけるかなー。としゃべっている隣で男２里は荷物持ちをされていた。
「買いすぎだ・・・ちきしょう・・・」と、バン・ギウが言う。そこにイリスが「ん？」というので、いやなんでもない。と誤魔化す。
「たしかになあ・・・バンの言うとおりだよ・・姫なんてこのごろお菓子食べすぎてるからぜってぇこんな服きれね――」

そこで言葉は途切れた黒月姫による渾身の蹴りを食らったためである。「ｺﾞﾌｩ」そこにバン・ギウが「カズノ・・・・・ドンマイ（笑」もう言い返す気力すら沸いてこない。
「よーし、じゃあ来年の初詣の日！みんなでいこうよ！」イルスが言う。
「「どこからそんな話になったんだよ！！」」男２人で突っ込む
あはは、と笑い声が聞こえてくる。
ドンっとシャオの顔がイリスの背中にぶつかる「イーリス！急にとまんないでよ！」
「あの子・・・」イリスが指差す方向には少女が１人イスに座っていた。
「へー結構かわいいねー」と、カズノ・ナスが言うと黒月姫からなぜか蹴り飛ばされた。こいつの考えてることがいまいちわかんねえ・・・
イリスは走って少女の方へと近づいていく。
「ねえ、キミ」声をかけるとゆっくりと上を見上げ綺麗な眸がイリスの眸と合った。髪の毛は黒くストレートに伸ばした綺麗な髪の毛だった眸は真紅の赤色で飲み込まれそうだった。
「前に・・どこかであったことあるっけ？」と、イリスが問うと少女はゆっくりと首を振る「あったことないよ」氷のように透き通る声で少女は答えた。すっと手を伸ばすと少女は何？という目でイリスを見た。
「そんなとこで１人でいないで私達と遊ばない？」
「おいイリス何してんだよ、俺達の中に仲間は増やさないってきめただろ？」バン・ギウが問う
「うん・・・でもこの子はなんかよくわかんないけど・・・・説明は・・できない・・」イリスは潰れそうな声でいう
「まぁ、いいじゃないかこんな可愛い子なら大歓迎だよ」と、シャオが言う。
５人分の友達登録が終わると少女は「帰らなきゃ」と、いって走っていってしまった。
４人の視線がイリスに集まる。
「理由は・・気かないよキミが決めたことだからね」と、黒月姫が言う
そこで解散して、シャオ以外のみんなは帰っていった。シャオは元気だしてっとか言ってくれるがその時の私には何も届いていなかった。（何だろうこの気持ちは・・・）イリスの心の中で何かがゴチャ混ぜになって整理できなくなっていった。結局その日は家に帰るとすぐに寝てしまった。
クリスマスまであと３日

III

「あのお姉さん「イリス」っいうんだ・・こんなすぐに見つかるなんて思っても見なかったよ。どうにかクリスマスの夜には全て片付けれそうだ・・・」スゥっと彼女の体は人ではない「何か」にかわっている。
次の日起きたのは９時だった。昨日嫌な気持ちで寝てたのに夢もみなく寝起きがとてもよかった。
友録（友達登録）の名前をみるとみんないなかった。（今日はみんないないんだぁ・・）落ち込んでいると、ピッという音がなる。昨日の少女だそういえば名前をしらないんだった。
————少しの間があった。少女の名前は「凜（リン）」たった１文字の名前なぜかその名前に

は覚えが合った何かは思い出せない。
「・・・・・・・・・・・考えていてもしょうがないよね・・・よし！」凜という名前の少女をＰＴに誘いどこかへ遊びに行こうというと、「うん」と、帰ってくる。
エリアスのファンシーショップ前に集合していた。５分前にいってつもりが少女はもうそこにはいた。こちらを振り向いて一礼してくる。するとイリスは「うーん服が・・地味！！」イリスが言うと少女はびっくりしてオロオロしている。
さ、いくよっといって洋服買いや狩りなど１日中この子と一緒にいた。楽しかったなぜだろうと時に疑問があった。
だけど少女はどうだったんだろうか・・・楽しかったのかな・・・・
でも今日は少女のいろんな事がわかった、少女は初心者で何もわからなく１人でイスに座っていただけ。それと感情を表に出さないこと。なんでも疑問に思うと聞かずにはいられないので、「ねえ、なんで笑ったりしないの？」と聞くと「笑う・・・？」と、帰ってくる。
「普通は可愛い服をきたりしたら笑うもんだよ！」そう今日は少女凜の地味な姿を変えるため買い物をしまくった。
そしてあの地味な格好から一転してとても可愛くなった街を今日街を歩いただけで３人もの男の人にナンパされた。（凜だけが）
「もしかして「笑う」ってしらないの・・？」
うん、とかえってくる。
「うぅーん笑うって事はねえ！・・・・・楽しいことなんだよ！」自分でいっといて意味がわかんない。
「えと・・・・わかんないです・・・・」イリスはそこらへんをウロウロしながら考えていると小石につまづいて転んだ。
「だ・・大丈夫で――」イリスが顔を上げると真っ赤にはれた赤い華をひょこっと見えた。
ﾌｯっと少女の顔がやわらぐ、（あ・・）イリスは心の中で叫ぶ。今笑った・・？
笑いがこらえられなくなったのか大きな声を出して笑い初めた。
あははあははっと笑うのみてついつられて笑ってしまう。とてもうれしかった。なんていうんだろう、頭ではわかってるんだけど、言葉にできない気持ちがある。ま、いっかと、軽い気持ちで考えていた。
「お姉さん」と、声をかけられた。「何？？」
「私のことは「凜」ってよんでください」笑顔でそういってくる。
じゃあ、といって「私のことはイリスって呼んでいつまでもお姉さんじゃちょっとね・・ｗ」
んじゃ写真とろうよ！と、強引にとり喜んでいたのは私だけむなしい。　そうして夕方５時ごろ２人は分かれた。
昨日今日と楽しい日が続くとその内グッと闇の中に引きずられてしまうような恐怖に見舞われる。
その夜シャオが家にきた。
「ど、どうしたの？」
「いゃ・・その元気だしてもらいたいなって・・思って・・・」

とてもうれしいそんな心遣いができる人だとは思ってなかったよ・・
「イリス今何考えていました？私のことバカにしてませんでした？」ムッと顔を突き出して問い詰められる
大丈夫、といって中に入ってもらい、みんなよんじゃおう！とかいう話になって残り３人がそろってうちにやってきた。
イリス大丈夫とか何度も聞かれた、みんなにこんなに迷惑かけてたとは知らなかった。
「そういえばさーお前ら兄弟とかいたっけ？ちなみに俺はいないよ！」と、バン・ギウがいう
「何いばってんのよ・・私もいないよ」
「私もかなーいたら楽しいと思うけど」
「カズノは・・・いるわけないよな」なんだとこのやろう
「イリスは？」と、みんなに聞かれて「いないよ」って答えようとすると、ｺﾞﾝっと頭を何かで叩きつけられたような痛みがきた。頭を両手でおさえこみ、ガ・・ｶﾞ･･･ｱ、と何かを言い出し始める。
イリス！イリス！とシャオが歩み寄ってくる。だがその声はイリスに届いていない。
イリスの頭の中にある記憶が混乱してくる、よみがえってくるのは今日１日の記憶。ガンガンと響く痛みの中に何か声がきこえる、なんだ？なにかが・・？　――さん　聞こえスッ目を閉じる聞こえた何かが・・・
「お姉さん」
「あ」
と声がもれるそこで記憶は途絶えてしまった。暗闇の中でグルグル回り続けているここはどこだ・・？
こ・・こ・・・・・・・・・・・・は・・・・？
「――ス！―リス！イリス！」声が聞こえる、体が泳ぐ声がするほうへと・・・
バッと顔をあげると目の前にはシャオの顔があった、見事にゴツっという鈍い音が聞こえた。
「いっったぁ・・・・」
「い・・イリス？大丈夫！？」寝起きなのにいきなり飛びついてくる。今にも泣き出しそうな顔で私の手を握っている。
「ここは・・どこ？」シャオにきくと当然の用に言葉がかえってきた。「ここ・・あんたの家ですけど・・・」
え・・・あ、ほんとだ・・・「やっぱりあんた記憶がどうにか・・！」「だ、大丈夫だってば！」
飛びついてくるのを振り払い立ち上がる、そして昨日の夢の事を思い出す。
「イリスなんであんなにうなされてたの？」聞かれても答えれない、本当かわかんないからだ。
「なんでもないよ」と答える。
本当はわかっている・・・多分本当のことだ、あの・・凛って子は・・・・私の――
こんにちわー！！っと大きな声がでてくる、来た！っとシャオが飛び跳ねる。みんながお見舞いとかいってクッキーやらケーキをもってきてくれたようだ。
「あのねあのね私もクッキー作ったんだよ！」シャオが言うとイリスは「え！？」

「何その反応・・・」
い・・・いゃ・・・別にと笑って誤魔化す。
正直にいうとシャオは料理がめちゃくちゃ苦手のはずだこの前目玉焼きを作ってもらったらなんかきなこのアジがした・・。
「今日さ、クリスマスだよ？わかる？」と、聞いてくる。
え？あと２日あるんじゃないの？と聞くと「あんた２日間眠りっぱなしだったのよ！」
さすがにびっくりしたカーテンをあけて外をみるとクリスマス風景一色でみんな可愛い服をきて出歩いていた。
[わ・・わああ」スゴイはしゃぎようだったのが自分でもよくわかる。
あと、とシャオが「あの女の子もよんどいたから」と言うイリスは一瞬固まった。「あれイリスやっぱ女の子つれてきちゃまずかった・・？」せっかくのクリスマスだしと、自分にいいきかせる「大丈夫、みんなで楽しもうね！」
７時に待ち合わせあうとすぐにエリアス都市にむかった。
エリアスの都市ではイベントということですごい祝い用だった、凜もその１人だった。お祭りは始めてといっていた、不思議に覚えたがそうも気には止めなかった。
射撃をみんなでやった私と姫の余裕勝ちだった。金魚すくいをやった、なんでか手が器用なバン・ギウが１回で２０匹も捕まえやがった。輪投げでは凜がなげると輪のほうから棒にはいっていく感じだった１００発１００中で勝利を収めた
楽しかった。１１時になっていたもうここにきてもう４時間も遊んでしまっていたのだ。イベント終了は２４時ジャスト、その時間にイベント発生といっていた楽しみだった。
スっと凜は私の手をとり手招きする。どこへいくのかと思いシャオやみんなもついてきた、
その瞬間視界が真っ暗になった「な・・・！？」明るくなると私達がいたエリアス都市は消えていた、いや私達が消えたんだ。そこにはシャオ、姫、バン・ギウ、カズノ、みんなが揃っていた、起き上がるとここはどこだっとみんなが叫び始める、だが、イリスだけは自然と立ち尽くしていた、なぜかこうなることがわかった気がしたから・・・。
目の前には１人の少女がいる・・「凜・・・」イリスは声をあげる。
皆が凜に視線をかたむける。
こちらを振り向く、とその瞬間ガンブレイドの用な物をとりだした。
「な・・なんだあの武器みたことないぞ！」バン・ギウは驚く。
「なんかよくわかんねえけど、あいつは敵として・・・みとめていいんだな・・」というとバン・ギウとカズノ・ナスは腕に
金色に輝く武器『雪輝忍牙』「ＺＥＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ」おたけびと共に回りに取り巻く空気があらぶり体の回りに強い光がまといつく、この時イリスは初めてみた。
　　　バン・ギウとカズノ・ナスの『本気』を
「そう・・・ね、敵である以上私も刀を抜こう」「しかたないっか、仲良く慣れると思ってたんだけど・・・ね」

黒月姫とシャオ・ユイが言う。
いくぞ、その言葉で４人が一斉に攻撃を始めた、。その時イリスは立ち尽くしていた、何をすればいいかわからなかったから・・・。
ﾋｭﾝっと一閃の光の弾丸が飛ぶ、その瞬間バン・ギウの体が倒される。
「な！バンどうした！？」シャオが叫ぶ。
「ｧ・・・・ｧアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」突如凛が叫びだしその姿が変わってゆく
なんだ・・・こいつは・・・　体の原型は元すらわからず頭ははじけとび大きな眸が1つグリュンとでてきた。
それから数分とかからなかった、のちに最強の冒険者とよばれる4人の戦士が倒れるのは・・。
「ガッ・・・つよすぎ・・・る・・・」
「なんだこいつは・・・・・」
姿をかえた凛は大きな手のひらでカズノ・ナスをつぶそうとする。
その時カズノ・ナスはすでに動けずあきらめていた・・・・がキィイイン甲高い音が流れる。
「あきらめんなカズノ！あんたは私のパートナーだろ！？こんなとこで死にやがったらしょうちしないぞ！」姫だ
姫が凛の腕による攻撃をかばってくれた。だがもたないっ「ｸｯ・・ここまでっ・・か・・・」
「ああああああああああ！！！」カズノが叫ぶその突如凛の腕が吹き飛ぶ。
「カ・・ズノ・・・」安心した声と鳴きそうな顔で名前を呼ばれる。
そしてカズノ・ナスは「俺のパートナーに手ぇだしてんじゃねえよ！俺が死んでも・・こいつだけはぜってぇしなせねえ！」叫ぶ、その声に姫は勇気をもらい生気にみちた用に弓を構える、さらにシャオとバン・ギウも立ち上がる。
「さぁて・・・」
「反撃と・・・いきますかあ！」うおおお！っと4人が一斉に襲い掛かる。
2人の拳が開いての左腕へとたたきつけられる「お前とはぁ、仲良く慣れると思ってんだぜ！こればっか大マジでだよ！」カズノとバンは聞こえてもいないであろう凛に叫びかける。
凛の姿の化物は足をついた、「これで閉めだ」シャオはその言葉と共にとびかかる
その瞬間、雷の矢が目の前をすぎる、「イ・・リス・・・？」
「やめてっ！！」イリスは的である凛をかばいはじめる。
「な・・・イリス何をいってんだ！こいつは敵だぞ！？何をかんがえてる！」
「そう・・敵・・だよ・・？でも、これだけは信じて・・・この子、凛は―――私の妹なの。」
空気が凍りつく「凛やめて！お願いだからやめて！」
やがてカズノが声をだす「バカな！デル族の生き残りはイリス1人だときいた！それがなぜ今になって『凛』という名の君の妹が現れる！？」ハァハァと息をきらし苦しそうに咳き込むカズノはもう体力の限界だったカズノだけではなく、他の3人もすでに限界は近づいていた。「ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ」凛が天にむかって手をのばしはじめるするとなくなったはずの右腕が再生されていくそれ以外にもきづつけていた全ての部分が回復していく、「な・・・・・」
「でわ、キミはどうする！この敵をまだ仲間といいはってこの世界にとどめておくのかい！？」

姫が私の肩を持ち目を合わせる「ごめん・・・・・」イリスは何かを悟ったように目を閉じる。
「だから凜は私にまかせて・・・」その声に迷いはなかった。
「もうすぐ24時だ、凜しってるかい？クリスマスのイベント24時ジャストに起こるイベントを」といったとき空から無数白い物がおちてきた、雪だ。
「この雪ね人工的にふらせてるんじゃないんだって、この街はこの日の24時になると雪がふってくるんだ。」イリスは言う白き雪がまるでこの幕を閉じるかの用にひらひらと舞い降りる。
「私はデル族の英雄イリス・イヴィエール！今ここで貴様を打つ！」
あの声は・・・デル族イリスだけがもつ自分の力を最大にリミッターの用なものだと聞いた、それが外れたときのイリスの力は今までの———5倍だ。
「はあああ！」一瞬で右腕が切り落ちる。「本当は妹と楽しく過ごしたかった。親もいない誰もいない私の支えになってくれたらなっとかいろんな事考えてたんだよ？だけど・・・・」言葉は途切れるイリスの目からはﾅﾐﾀﾞが流れていく下につもった雪へと流れ落ち最後の言葉を告げた「さよなら、次にあうときは『友達』として・・・」
「インフィニティダンス」光の羽が無数の数で凜の体を突き抜ける、そして・・・消えていく・・その瞬間目の前が人の中にとけこんだ。エリアス都市に戻ってきたのだ。こうして短いようで長かったクリスマスの夜は終りを告げた。
12時59分雪がとけ人影はほとんど消えている、そしてイリスは座り込みこらえていた大粒の涙をはきだす。
1時丁度の鐘が鳴り響くその音に紛れイリスの泣き声はかき消されていく・・・。

Ⅳ

～1年後～

「イリスー！また遅刻かー！！」その怒声はシャオのものであった。
「ごふぇーん」と食べ物を口にしながらしゃべる。「まったく・・・1年前と全然進歩ないわねえ・・・」
私達は新しい年を迎えたのだ初詣もいったし夏祭りもいった。
今は9月の中旬でちょっと肌寒くなってきたくらいだ。
「今日はカズノが今年一番のエンチャントしてくれるってよ！急がないと！」と、シャオが言う
「はいはいー！」玄関にいく前に自分の部屋によっていく、そして、写真立てにはいった自分とクリスマスに出会った少女『凜』の顔をみる。ふっと笑いながら写真にむかって
「それじゃ凜・・いってきます！」
元気よく言うと走って玄関に向かい外にでるとシャオが待っていた。さ、早く早くとせかすシャオを追い走りながら凜に心から呼びかける
（ずっと忘れないよ凜・・・・・・・・凜は私の光であり命そのものだったよ」